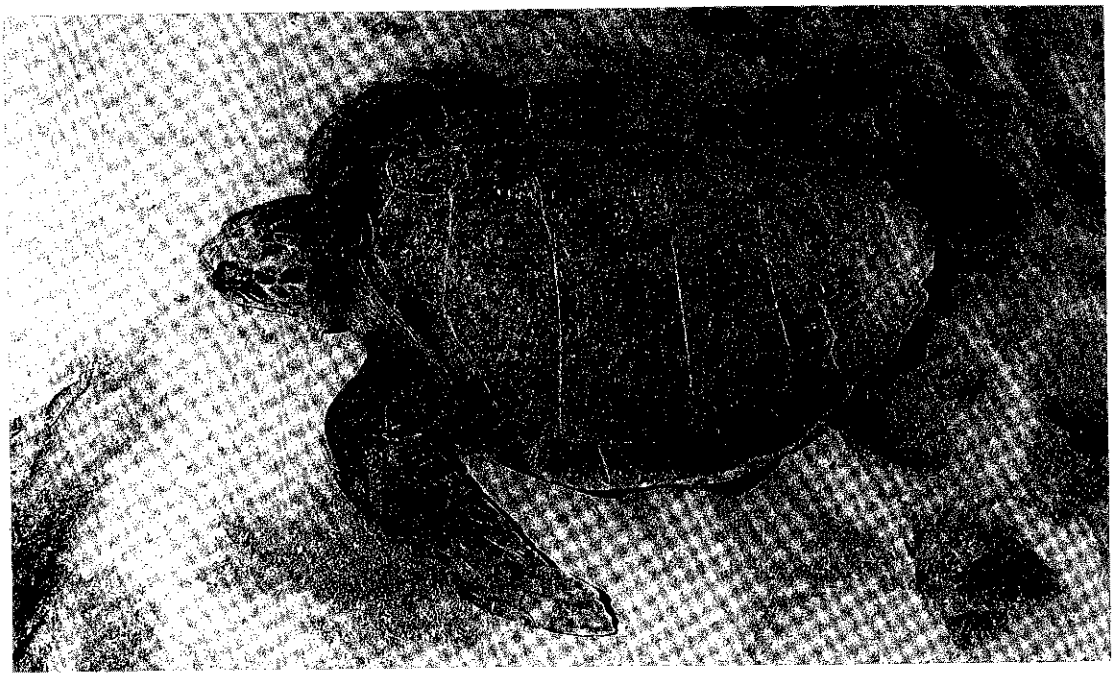
ISSN 1341-6928

串本海中公園
マリンパビリオン

1999. 4. Vol. 28, No. 4



ヒメウミガメ
Lepidochelys olivacea **(Eschscholtz)**

世界中の熱帯・亜熱帯海域に棲息する種で、インド北東部やメキシコ西海岸などには数十万頭にもおよぶ大集団が上陸する産卵場がある。我が国では繁殖例がなく、来遊例も極めて少ない。和歌山県串本町および近隣沿岸海域における1972年以後の確認は、目撃例を含めて５例があるのみで、直甲長50.0～64.8cm、体重40.9kg（1個体のみの検量）の成体クラスと思われる個体が記録さ れている。本種はウミガメ類中では最も小型であり、甲羅の色彩は背甲が灰色、腹甲側では白色をしている。また、甲長と甲幅長との直線距離の差が小さいために甲羅の外周が円形に近い、という特徴をもつ。食性は動物食で、飼育下でも餌として与える魚類、イカ類、エビ類などをよく食べる。写真は1989年10月に和歌山県那智勝浦町宇久井の定置網に迷入し、その後に串本町錆浦から標識放流された個体。ウミガメ科。

I.M.

串本海中公園センター

第1回 サンゴ展　－白化現象について－

小寺 昌彦

開館より30年を迎えようとしている当館の主役はまちがいなく「サンゴ」であろう。その「サンゴ」をテーマにした初めての特別展を3月20日から「第1回サンゴ展–白化現象について–」と題して開催している。サンゴについて紹介したいことは山のようにあるので、無理に1回で展示せず、数回に分けて紹介するというこれまでにない特別展の方法を取ることとなった。

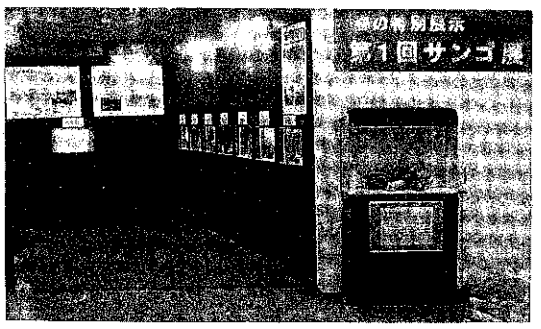
第1回のテーマに「サンゴの白化現象」を選んだのは、もちろん昨年の世界的な白化現象を受けてのことだが、テレビや新聞で大きく取り上げられた事柄なので、話題性があり、サンゴについて全く知らない人にも取っ付きやすいのではないかと考えたからである。また、「白化現象」を紹介することは、サンゴ（造礁性イシサンゴ類）の基本である褐虫藻による光合成の説明をすることができ、構成上好都合だったこともある。

この特別展では、8つの水槽と5枚のパネルによる解説を行っている。展示の主役となる生物はこれまであまり展示することがなかった「白化したサンゴ」や「死亡後、海藻に覆われたサンゴ」のように、「病気」や「死亡」したサンゴである。しかし、「白化」のピークから半年も経っていて展示に適した白化サンゴが手に入らないため、健康なサンゴをいくつか展示したものの、従来の春の特別展と比較して小さな規模となってしまった。実際「白化した様々なサンゴ」がずらっと並んでいても面白味が少ないのではと思えたところもある。展示水槽にはそれぞれサンゴを1、2群体入れ、水槽内に動きをつけるために数個体の魚も入れた。展示水槽は閉鎖式の上面濾過である。また、パネルによる解説では、サンゴと白化現象について簡単に紹介している。

さて、展示の主となった造礁性イシサンゴ類の飼育では、光の量が最も大事な条件になると思うが、展示は7つの水槽に3波長蛍光灯40wを3灯と20wを1灯、サンゴと蛍光灯の距離を60cm前後、これを24時間当て続ける光量で飼育し始めた。しかし、ポリプの伸びの悪いものがあり、光量が足りないと思えたので、光量を増やした。結局、1水槽に20wを2灯ずつ、しかも水槽に器具を直に置きサンゴと蛍光灯の距離を20cm前後に近づけた。その結果、展示開始から3週間を過ぎたころの飼育状態は、ミドリイシ類などの一部サンゴを除いて良好で、「回復中のサンゴ」と題して展示したキッカサンゴはさらに回復が進むこととなった。しかしながら、その光量のためにガラスの藻類による汚れは異常に速く進行し、毎日のようにガラスを磨かなければならなくなった。これは常設展示のイシサンゴ水槽の比ではない頻度である。

ところで、見学者の反応はあまり良くないというのが現状である。理由として、特別展示の設置場所に問題があったと思われる。今回の特別展ではこれまでと異なり喫茶コーナーのあった袋小路を改装して展示したのだが、この場所は見学者には目につきにくい位置だったかもしれない。また、水槽が8個と少なかったことや、展示会場が袋小路になっていて狭いことも理由としてあげられそうである。さらに「白化現象」という難しいテーマ（？）により、親が子供に説明しにくそうな雰囲気を与えていることも今ひとつ盛り上がらない理由ではないだろうか。

なお、この「サンゴの白化現象」の展示は5月5日までである。第2回は2000年3月に「サンゴは動物？（仮題）」と題して、サンゴの仲間である様々な刺胞動物を紹介する予定である。はたして見学者を引きつける魅力的な展示ができるかどうか。

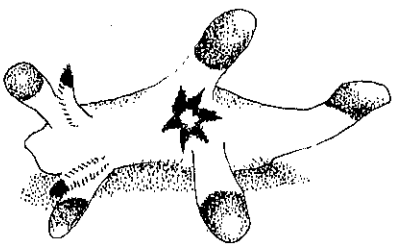


ウデフリツノザヤウミウシ

宇井 晋介

ウミウシの仲間は数ある海の生き物の中でも、飛び抜けて派手な色彩のものが多い生物である。この派手な色彩は、主に警戒色であると言われているが、確かにケバケバしい色の組み合わせは、捕食者に警戒心を起こさせるに十分である。今回採集したウデフリツノザヤウミウシも鮮やかな黄色の地に、大きな２本の突起を持ち、突起の先端はこれまた目も覚めるような鮮やかな青色に染め分けられている優美なウミウシである。このウミウシは、深さ約13mの砂地の中にある岩場で見つけたもので、発見時、ちょうど交尾中であったが、その鮮やかな黄色は相当遠方からでも確認できた。

鮮やかな色彩は展示にぴったりと思い持ち帰ったが、当初は食性がわからず、また当地では珍しいので標本とした。ウミウシ類は極めて多様な食性を持つことで知られており、藻類からカイメン、群体ボヤ、イソギンチャク、ソフトコーラル、サンゴ類、甲殻類中には同じウミウシ類を食べるものまである。また浮遊性の種ではクラゲを食べるものもある。水族館であまりウミウシ類にお目にかからないのは、こうした餌を継続的に入手するのが難しいからである。しかし、ごく最近の図鑑によるとこの種はどうやら藻食らしく、次回採集できればぜひ展示してみたいと考えている。というのも、この特徴的な色彩、今子供たちの間で流行している漫画のキャラクター「ピカチュウ」にそっくりなのである。あわよくば数個体採集して、展示の目玉にと考えているが、果たしてもくろみ通りに採集できるものかどうか。



新人自己紹介

堀木 暢人

昭和47年10月20日生まれ。マリンパビリオンの開館とはたった２日しか違わない26才の同級生です。生まれも育ちも串本で、海中公園から１kmと離れていない高富という集落の出身です。

小さい頃から生き物が好きで、特に昆虫や魚に興味を持ち、海や山をタモ網を持って走り回っていました。中学、高校になってもゴッチョウ（カサゴ）釣り、素潜りでのナガレコ（トコブシ）採りや、ウナギやアユ採りなど海や川で良く遊んでいました。

そんなことから、大学では水生動物の勉強をしてみたいと考え、鹿児島大学水産学部に進みました。大学時代は海洋生物学を専攻し、魚類研究室に所属していました。卒業論文では「鹿児島における本土アユの遡上生態」、修士論文では「奄美大島におけるヨシノボリ類の分布生態」について研究しました。また、研究室に入ってからはリュウキュウアユの調査で各河川での魚類相調査にも参加し、淡水魚、特に奄美大島の川にどっぷりつかった４年間でした。

そのため、この度、晴れて串本海中公園に就職できたにも関わらず、海産の生物に関する知識は乏しく、仕事をする上で必要なダイビングの経験もないという素人同然の状態です。現在、働き初めて約１ヶ月になり、担当の水槽も決まりましたが、まだわからないことばかりで勉強の毎日です。

今後は、まず、１日も早く自分の仕事をきっちりとこなせるようになること、そして、串本の海やそこに住む生物の知識や飼育、潜水の技術を身につけ、地元でもある串本の海のすばらしさをみなさんに紹介できるようになりたいと思います。今はまだ戦力にはなりませんが、唯一取り柄ともいえる大学時代に体育会で養った体力とガッツで頑張っていきたいと思います。

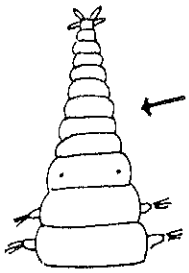
POLYCHAETOLOGICA （4）　多毛類の科の検索　2

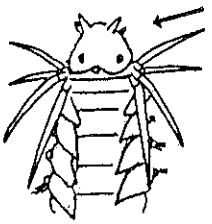
内田 紘臣

前回(Vol. 27, p. 69)に続き、多毛類の科の検索表をあげる。

10(9).前口葉（ｾﾞﾝｺｳﾖｳ）は長円錐形で、環状分節する.　24

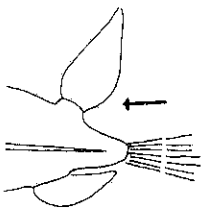
10.前口葉は環状分節しない.　11

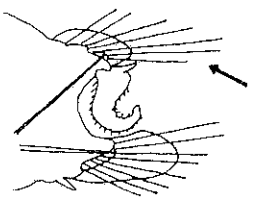




11(10).疣足は背剛毛（ﾊｲｺﾞｳﾓｳ）を欠く.　12

11.疣足は背剛毛をもつ.　18

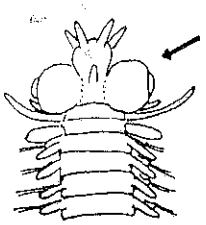


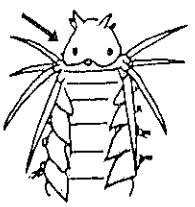


12(11).前口葉から突出した大きな目をもつ（本シリーズ（2）図3-c）.

ウキゴカイ科　Alciopidae

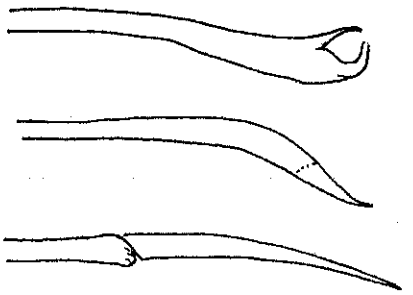
12.前口葉から突出した大きな目をもたない（本シリーズ（2）図4-a）.　13





13(12).剛毛は全て単剛毛（simple setae）もしくは擬複剛毛（pseudo-compound setae）.　14

13.剛毛は大部分あるいは全て複剛毛（compound setae）.　15

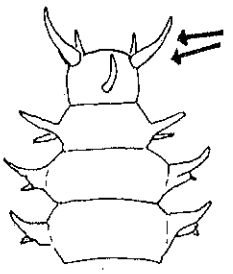


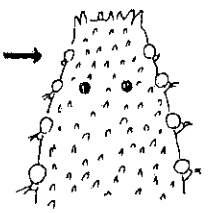
14(13).前口葉は5本の感触手（antenna, 複 antennae）をもつ.

Fam. Antonbruuniidae

14.前口葉は明瞭な触手様突起を欠く.

コブゴカイ科(42)

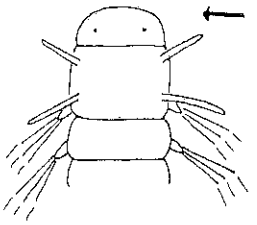


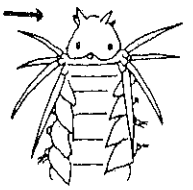


15(13,26,33).感触手を欠く.

Fam. Iospilidae

15.感触手をもつ（本シリーズ（2）図4-a）.　16

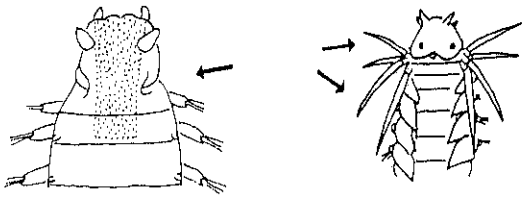




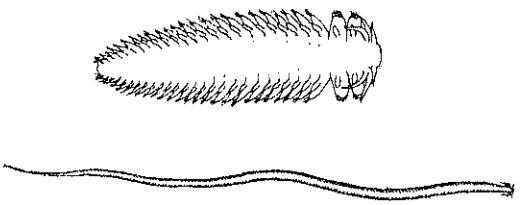
16(15).触手鬚を欠く.　24

16.触手鬚をもつ.　17

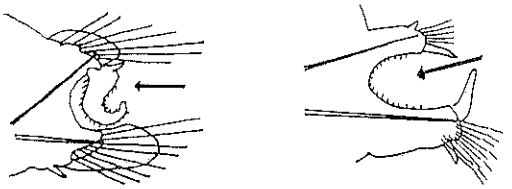
（図：次ページ頭）



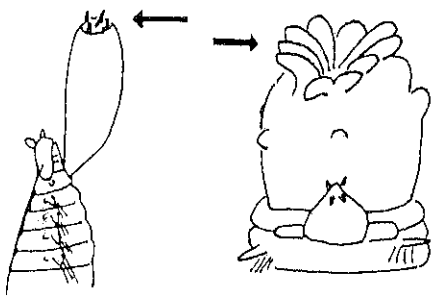
17(16,23).体は短く扁平で、無色透明. 浮游性.
ユメゴカイ科 Lopadorhynchidae
17.体は長く蠕虫（ｾﾞﾝﾁｭｳ）状で、不透明. 底棲性.
サシバゴカイ科 Phyllodocidae



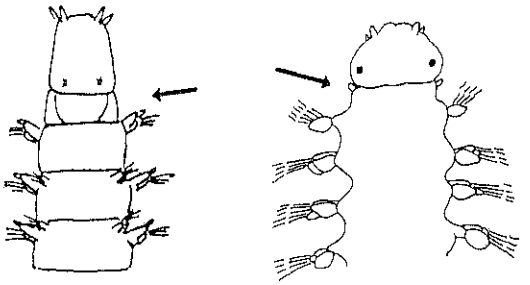
18(11,22,44).背疣足と腹疣足の間に、背疣足から垂れ下がる鰓（ｴﾗ, branchia, 複 branchiae）がある.
シロガネゴカイ科 Nephtyidae
18.背疣足と腹疣足との間に鰓はない.
19



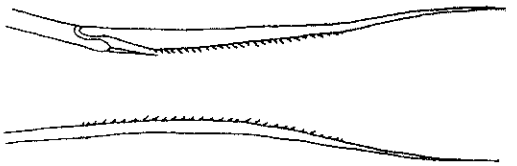
19(18).口吻先端には同型同大の４本の暗褐色の顎片がある.
24
19.口吻先端には暗褐色の顎片はない.
20



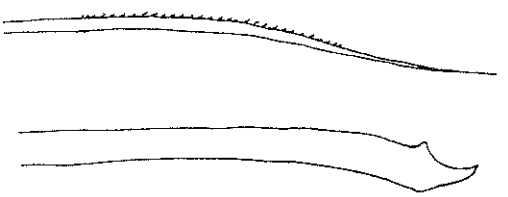
20(19).触手鬚を欠く. 21
20.触手鬚をもつ. 23



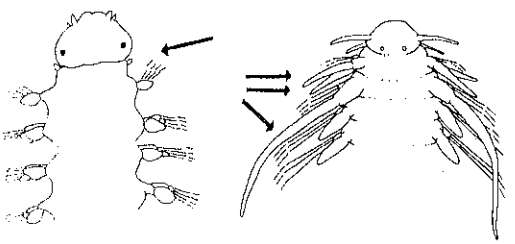
21(20).腹剛毛（ﾌｸｺﾞｳﾓｳ, neuroseta, 複 neurosetae）は全てあるいは大部分複剛毛
Fam. Paralacydoniidae
21.腹剛毛は全て単剛毛 22



22(21).腹剛毛は背剛毛と同様の針状剛毛（capillary setae）.
シロガネゴカイ科(18)
22.腹剛毛は足刺状剛毛（acicular setae）.
属 *Nans*（17. ユメゴカイ科？）



23(20).触手鬚は左右１本ずつ.
Fam. Lacydonidae
23.触手鬚は左右３本ずつ. 17

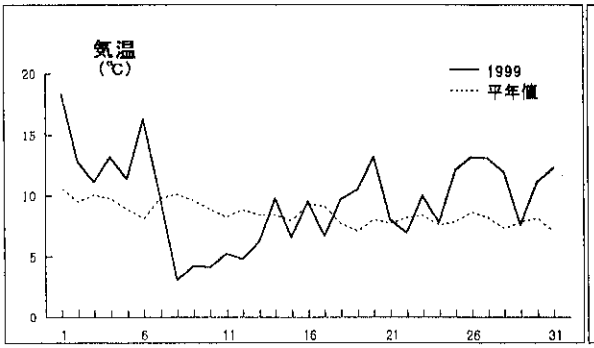


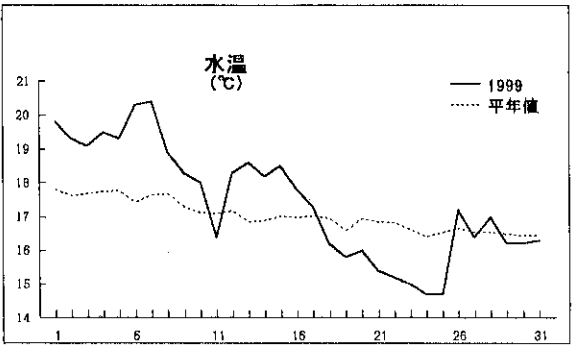
錆浦の海から

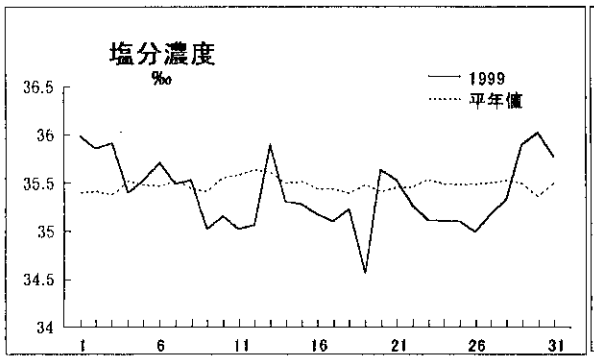
宇井晋介

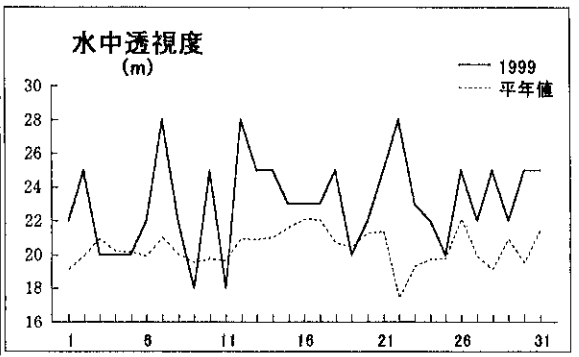
3月平均値	気温　13.7 ℃	水温　17.7 ℃	塩分　35.40 ‰
	透視度 17.3 m	月間降水量　137.9 mm	

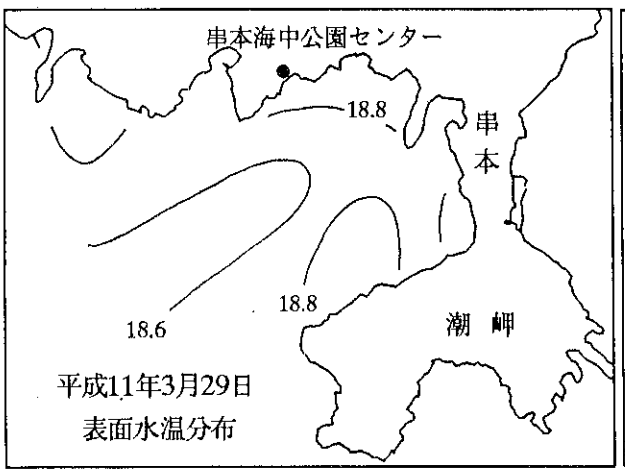
海中展望塔は、海岸とコンクリート製の通路で結ばれており、この両側は様々な生物たちの住み家となっている。ここには貝類をはじめ色々な生き物が住み着いているのだが、海藻類もまた豊富に見られ、春にはヒジキ、ホンダワラ類、アオサなど、冬にはアマノリなども多く見られる。今春はここで面白いことが観察された。この通路を挟んで東側にはヒジキが例年の通りびっしりと生えているのに、反対側の西側には全く生育しなかったのである。通路を挟んで10mほどしか離れていない場所で、これほど成育状況が異なった原因としては、左右で海水温が異なったことが考えられるが、突堤の長さはせいぜい100m程である。しかしどうやらその100mが潮の流れに微妙な変化を与えたらしい。生物の分布にはある所を境にきっちりと線引きができる場所があることが広く知られているが、我々人間の活動は思いもよらぬところでそうした分布地図にも影響を与えている。











平成11年3月29日
表面水温分布

マリンパビリオン Vol. 28, No. 4 通巻 328号
1部 50円（年間購読料 1,500円 送料含む）
印刷日　平成 11 年 4 月 20 日
発行日　平成 11 年 4 月 25 日
口座番号：00990-9-41351
口座名称：串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
（株）串本海中公園センター
電話　0735（62）4875
FAX　0735（62）7170
印刷所
坂本印刷
串本町串本2481　Tel: 0735（62）0895